

と く  
徳

ほ う  
朋

分かっちゃいるけど・・・

まつもと かじまる  
松本 梶丸

まつもと かじまる

1938—2008

石川県出身。真宗大谷派出  
版部、研修部勤務を経て、  
真宗大谷派本誓寺元住職。

ハナ肇<sup>はじめ</sup>とクレイジー・キャッツ。我々の世代にとっては懐かしいボーカルグループである。数々のヒットを飛ばし、多くの流行語を生んだ。「とにかくこの世は無責任」「ハイ、それまでヨ」「遺憾<sup>いかん</sup>に存じます」「ああ、わびしいナー」等々。～中略～ それらの言葉は一見ふまじめのようだが、世相を反映し、機知と諧謔<sup>かいぎやく</sup>と人間に対する共感に満ちている。そうした言葉の中で、多くの人々の記憶に残されているのは、「分かっちゃいるけどやめられない」（「スーダラ節」）ではあるまいか。

メンバーの一人であった植木等は、浄土真宗のお寺の生まれ。父・植木徹誠<sup>てつじょう</sup>は部落解放運動に生涯を尽くした、厳しい求道者であった。植木等はこの父を尊敬し、曲を発表する時、いつも父に意見を求めたそうである。この「スーダラ節」をレコーディングする時も父に見せたところ、徹誠<sup>てつじょう</sup>は「この歌には念仏のかおりがある。親鸞聖人の教えがある。大いに歌って広めてくれ」と励ましたそうだ。

恐らく徹誠<sup>てつじょう</sup>は「分かっちゃいるけどやめられない」の一句に、人間の生きている現実を感じ取ったのであろう。ふざけているようだが、この言葉には人間のどうすることもできない悲しみと、真実が歌われている。腹を立てる事は悪い事、悪口を言う事はわるいこと、人に迷惑

をかけてはいけない。みな分かっていることばかりである。だが、分かっている、どれひとつ人間の努力で止められるだろうか。「分かっちゃいるけどやめられない」。この一句の背後に私は念仏の声を聞くのである。いかに分かっている、その善し悪しを知った知恵で決着がつかないところに、人間の生命は流れ続けている。

「善悪の生所<sup>しょうじよ</sup>、わたくしのさだむるところにはあらずというなりと、これ自力をすてて他力に帰するすがたなり」(執持鈔<sup>しゅうじしやう</sup>)。本願寺第三世・覚如上人<sup>かくにょ</sup>の仰せである。悪口をいう事も、腹が立つことも、嫉み妬む<sup>そね ねた</sup>心も、善し悪しの思いに先立つ、いかんともすることの出来ない人間の生命の現存在である。そこへ帰れば懐かしい人ばかりではないか。

(『生命の見える時 一期一会』)



わたしたちの感情や行動は自分の努力ではどうすることもできないという悲しい気付きが、「わかっちゃいるけどやめられない」という一言で言い表されています。世間的地位や立場が違えども、共に愚かで「やめられない」者同士のわたしたちです。格好をつけずに愚かなままで共に生きたいものです。(哲弘 拝)

この「徳朋<sup>とくほう</sup>」は仏教を拠り所として生活した方々の言葉に直に触れ、仏教を頭で一生懸命に理解するのではなく、この身で感じる事を願いとして副住職が毎月作成しています。

